

## 民主的生活の基礎としての米國小學教育の發達大觀

小 西 重 直

### 一

米國へ最初植民せる英人の中には清教徒の一團の如く信仰の自由を得んと宗教的動機に因るものもあつた、彼等は最初和蘭に移住し信仰上の壓迫より免れたるも其子供達が和蘭風に化するを喜ばず、信仰の自由を得ると共に英民族的生活を維持せん爲めに新大陸を憧憬し、ブリマウスに上陸せる精神的植民者であつたのである。然れども東海岸の中央部や南部に殖民せるものゝ様に經濟的動機に因るものが多數であつて而かもゴールドを發見せんとの空想的な冒險家も少くはなかつたのであるが、其植民の動機の如何を問はず、彼等は全體に於て自己の生活を自分で決定せんとする様な自由な自主的態度を有して居つたのである。ミュンスターベルヒは民主國の人間は自主的な自己決定的態度を有するは當然であるが、佛國の共和政治は主として合理的な論理的な思想上の力に依存し、米國の民主的な政治は其内

面の實際的要求である其意志の力に依存して居る (Minsterberg-Die Amerikaner, 1904. Vol. I 53 54S) といふて居るが、佛國は兎も角米人の自主的な發展の跡を調べて見ると植民時代より今日に至る迄斯かる傾向を有することは否定することの出来ない事實である。

此實際的要求より起れる理念と實行とは、米國の建國、米國の發達を可能ならしめた中核である。而して此理念の存續此理念の實現には自己完成といふことが必要である。是に教育といふ事實が起り、教育夫れ自身の方針や方法に關する研究も漸次必要になつて來たのである。自己決定と自己完成、即自主自由の生活と教育此二つのものは米國の發達と離るゝとが出来ないのである。(Ebid.-Vol. II 1-22S) 然しながら植民時代に於てはコネクチカットやロードアイランドの如き自治特許の場所は別として王領や地主の勢力を中心として居る所の植民地に於ては未だ十分なる政治的自治とはいはれない状態にあつたのであるし、殊に經濟的生活に於ては人と自然に對し非常な奮闘を要したのであつて、彼等は先づ生物的な自活の途を立つるに急であつたのは止むを得ないことである。然しブリマウス植民以來僅かに十八年にして宗教的精神を根柢としたイングラント風の大學といはれたハーバート大學の基

礎が置かれたのは實に敬服に價するといはねばならない。其後ヴァージニアに於てはスコッチ風と稱せらるゝ所のウヰリアムズアンドメリー大學も來米國風の大學だと稱せられたエール大學も十八世紀の初めに創設され、獨立布告に至るまでの間に約十個の大學が建設されたのは注目し得るのである。固より各大學は其創設の當時に於て夫々非常に苦心し、其發達に就ても辛抱強く堅忍自重の態度を示して居ることは日本の官立大學など比較されべきではない様に思はれる。例へばハーバート大學はボストンがマサチューセツツ灣殖民地の首都となつた八年目即千六百三十八年に宗教家ハーバートの數百ポンドに價する遺産及二百六十冊許りの藏書の寄附によりて其基礎を置かれたのであるが此義舉に激まされて或は綿服だとか皿五枚だとか、砂糖匙一個とかいふ様な篤志な寄附もあつたといふことである。米國は人民の國である様に米國最初の大學も實に人民によりて其基礎が出来たのである。エール大學の如きも十一人の牧師が自ら進んで建設委員會を組織し各人が寄附せる四十冊の書籍を以て創設の基本となしたのである。此等十一人の委員中六人までがハーバート大學の卒業生であるのでエールは米國育ちの人の手によりて起された最初の大學といはれて居るのである。而かも大學開設後一ヶ年半の間は學生

1001

は僅かに唯たの一人のみであつた。日本などでは學生がないのに大學は無用である廢止すべしなど、議論を出てることと思ふがよく辛抱したものである。場所の如きも初めは三ヶ所に於て開講され、後六ヶ所に分在し、ニューヘーブンに統一されて永久の基礎を置かれたのは實に千七百十八年であつて創立後十七年目のことであつたのである。

社會の發達する初めには其指導者を養成することが必要であるから高等の教育機關を先きにするのは止むを得ないことであらう、米國の植民時代に於ても民主的、自主的生活に必要な自己完成の教育は初めは一部の階級に限られ、主として高等の教育に力を入れ小學教育、民衆一般の教育に就ては甚だ振はなかつたのである。例へばヴァージニアなどに於ては最初の植民は千六百〇七年であるが、約十ヶ年間計りは學校といふものはなかつたのである、千六百十六年に初めて英國王ゼームス一世の考で印度人や白人の子弟の教育の爲めに學校設立の企てがあつたけれども殆んど實現されなかつた。其後數年を経て東印度會社所屬の船醫が乗客より七十ポンド許りの寄附金を集め此を以て教會又は學校を起さんとせしもこれまた實現されなかつたといふことである。多少小學校らしきものが出來たのは千六百三十

四五年の頃からである。中央部の植民地紐育などに於ても最初の小學教育は殆んど滑稽じみたものである、和蘭人が此處を占領せる時代にも多少の教育的施設があつたのであるか、千六百六十四年に英領植民地となりニューアムステルダムはニューヨークと改稱され初めの間は和蘭人などを教師に備つて居つたのであるが、其契約書などが餘程面白いものである。例へば學校の授業は午前八時より十一時迄であるとか、一ヶ年の中九月より六月迄九ヶ月間授業する義務を有すとか、教師は教會を掃除し人民が教會に集る前に祈禱開始を一般に知らしむる爲めに三度寺鐘を鳴らすべしとか、教師は人民の埋葬がある場合墓の穴を掘り相當の報酬を受くるといふ様な條項などが見へて居るが、要は當時の教師といふものは教師であり、牧師であり、教會の小使であり、墓穴を掘る人夫であるのであつたのである。斯の様な教師によりて一般人民の自己完成が可能であるといふことは頗る疑問である。(Dexter: History of Education in the United States 1904, 581-583 p.) 中央部の植民地に於てもペンシルヴェニアの如きは植民後間もなく小學教育の爲めに力を盡したといふので注目されたのである。蓋し此地方の植民はウヰリアム、ペンによりて創設されたのであるが彼の父は元來海軍の將官であり、下院の議員ともなり英國では相當に勢力を有して居つたとい

ふことであるが、政府より若干金を受取るべき権利を有することを其子のウキリアム、ペンに遺言として傳へたのであるが、チャールズ二世は其金を支拂ふ代りに米國の此地方をペンに讓與したといふことである。ペンは此地方を *Sylvania* (*Woodland*) の意と稱したのであるが王は更らにペン家のペンを此れに附加して遂に *Pennsylvania* と稱するに至り千六百八十一年に若干の人間が此處に植民し翌年ペン自ら此地へ來り *Philadelphia* (*City of Brotherly Love*) を建設したといはれて居る、ペンは元來牛津大學の學生時代より熱心なるクエーカー宗の信者であつて、父は此を喜ばずして佛國へ轉學せしめた程であつたが、ペンは矢張飽く迄其信仰を改めなかつたのである。元來クエーカー宗の極端なものは、聖書は宗教にあらずして宗教の記録である、眞の宗教は人間の内面的な眞情に存すといふ様な考で平和な生活を主唱し素朴な簡易な正しき生活を慕つて居つたので、動もすれば學術的眞理の研究に對しては此を無用視するの傾向を有して居るのであるが、ペンは神の生活に近くには教育が必要である、神の意に一致する所の眞理は生活上價値あるものと認め、殊に數學とか測量とか建築、造船等に關する知能を有益のものと考へて居つたのである。其植民創設の翌々年即ち千六百八十三年に人民會は已に學校令を通過し、兒童の保護者は兒童十二

歳に至る迄の間に已に書を讀み字を書き得る様に教育せねばならない、凡ての兒童は日常生活に必要な職業的準備に就ても教育されねばならない、此等に違反するものは五磅の科料に處すといふ様な法令を設くるに至り、其後六年菲府に Friends' public school などが開設され凡ての階級を通じ、男女の兒童を入學せしめ貧困の子弟は無月謝となせる如き其當時に於ては注目に價する事業であつたのである。

北部殖民地なるニューイングランド地方に於ては例へばマサチューセツツ灣植民地などに於ても其植民創設後十數年にして小學教育に關する法令上の規程も制定された、即ち千六百四十七年に發布せる法令を見るのに五十家族を有する場所は一の小學校を、百家族を有する場所には一の中學校を建設すべきことを規定し、一ケ年以上此を怠る場合には五磅の科金を課することにしたのである。然しながら當時は日常の實際の生活の爲めに忙はしく多くの場所に於ては學校を設くるよりも五磅の科金を納むる方が安價なりとの考を有し學校の開設極めて稀れであつたといふことである十八世紀の初め頃になつても普通教育は尙一般に不振であつて、子供は學校へ行かず、學校は子供へ行くといふ奇態な現象であつた、即ち巡回學校であつて學校が諸所に巡回して一ケ所に數週間又は三四ヶ月の間學校を開き各地を轉々巡

回して教育するのであつた。(Martin-Evolution of the Mass. public school System 1894:75p.)

コネクチカット地方の植民も千六百三十一年頃より漸次創設されたのであるが、教育に關する規程は千六百五十年のコネクチカット法令の中に初めて見えて居るのである。例へば兩親は其子供に英語を教へしむる義務を有す、又宗教教育を強制し、出来る丈實業教育をも施すべしと規定して居る、ヘンリー、バーナードの所説によれば十八世紀の初めに於る、コネクチカット地方に於ては兒童の保護者は兒童に聖書を讀む力を養ひ又同地方の主要な法令を理解し、正しき職業の準備教育を施して居つた、七十家族以上を有する場所にては一ヶ年を通じて一の小學校を開き、七十家族以下の場所にては一ヶ年に少くも六ヶ月間小學校教育を施す様になつて居つたといふことである。(Report of Educational Committee 1892-3 Vol II Hinsdale-Documents Illustration of American Educational History)。

要するに植民時代に於ては教育に關する法令上の規程を設くる以前にも個人又は團體よりの補助の下に多少の實際的な試があつたのであるが、法令上の規程と共に一般的教育施設が公共團體の義務行爲となつたのである。歐大陸に於ける様に教育は教會によりて獨占さるゝことなく、社會一般のものであるといふ民主的態度



であつたのは新大陸に於ける特色である。然し其實際に於ては其實施の狀況甚だ不徹底なもので従つて今の米國人が標榜する様な人民自決の政治生活や、人民自決の社會生活が十分に徹底することが出来なかつたので此點は實は尙階級的であつて平等自由に到達して居らなかつたと見るより外はないのである。

—

植民時代は印度人や英國以外よりの植民者との交渉葛藤は別として主としては客觀的自然界に對する加工であつた、自然界を自然其儘に放任せず之れに人の力を加へたる點より見れば一種の文化事業であつたけれども、大體に於ては生活其のものに忙はしく、自由獲得といふ點より見れば自然を支配することに主力が注がれ、自然支配の自由とでもいはるべき時代であらうと思はれるのであるが、獨立戰爭によりて更に政治的自由を得たのである、否な嚴密に言はゞ政治的自由と言はんよりは先づ政治的に解放され、然る後漸次其自由を發達さして來たのである。獨立戰爭は、英本國より見れば國法違反の密輸入者等の利己心が動機となつたとも見られやうが、米人に取りてはニューヨーク地方の少數の勤王者を除きては英本國の暴

政に對する正義の戦であつたらう。思想の方面に於ては佛國の革命が啓蒙的思想の背景を有する様に米國に於ても理性的な理神教的思想が清教徒の舊思想を壓迫し、理性的な自我の自覺を見るに至り、正義自由の叫を高めたものとも見らるのである。リレーの論ずる様に當時の理神教的思想には四の流れがあつた、一はゼフハーンソンなどの政治的理神教的思想であつて國家の補助を受くる教會的思想より轉じて哲學的考察の自由となつたものである、二は、フランクリンなどを中心とする自然主義的理神教的思想であつて神異的の傾向を科學的傾向に轉じさせたものである、三はアレンなどの主張する合理的理神教的思想で神の默示を排して理性を重んずるに至れるものである、四はペーンなどの常識的理神教的で一般人民の間に理性尊重の自覺を喚起したものである。(Riley—American thought (1915: 54-95p).)

政治的に解放された状態より人民自身の眞の自由政治に達するには國民一般の普通教育が根柢であらねばならぬけれども眼前に迫る問題として先づ國民の經濟的生活の向上を圖り教育事業は第二の問題とされたのである、大體に於て南方は益農業の發達を圖り北方にてもマサチューセツツの造船業は益進歩の狀況を呈し、千八百二十五年エリノ運河の竣功と共に紐育市は物資集散の大市場となり、人口も俄か

に増加するに至つた。獨立戰爭開始前より英國にては機械を米國に輸出することを禁止せるが戰争後は此禁制一層嚴重となつたにも拘らず、或は英國に渡りて工場を視察するあり、自ら進んで機械を發明するものも出て來た、殊に千八百三十年より同四十年に至る十年間は米國に於ける工業革命時代とも稱せられ馬力や水力が蒸氣力に其地位を譲り、機械工業が益々隆盛に趣く様になつたのであるが其頃より早くも勞働問題を起し來り千八百三十一年にはボストンに於て農民や勞働者の會合を見るに至り、彼等の子弟の教育問題などに就ても意見の交換があり、教育普及の聲は農民や勞働者の側よりも高められて來たのである。殊にホレイス、マンやヘンリー、バーナードなどの教育行政官が米國本來のデモクラシーを實行せねばならぬと考へ一意専心小學教育の改善に努力し、其内容の實績を擧ぐる爲めに主としてペスタロッチの教育主義を採用したのである。社會の改革者であり、教育の階級的占有的の破壊者であつた彼のデモクラシー的思想と事業、凡ての人殊に下層の人を愛した彼の眞情、其自由な活動的な、調和的な彼の教育思想がデモクラシーを憧憬する米人に歡迎されたのは實に偶然ではないのである。十九世紀以後に於ける獨逸の初等教育の發達はペスタロッチの精神に基くといふも過言ではないが、一時は保守

派の爲めに壓迫を受けデエステルウエヒなどの奮闘によりて漸く再び此教育神の復活を見るに至つたのであるが米國に於ては斯様な慘劇の歴史を見なかつたのである。現代に於ては昔のペスタロッチー主義其儘では教育界の蘇生も困難であらう。ペスタロッチーの眞情に基き更らに其社會的な理性的な精神を發展させる様な新ペスタロッチー主義が現代の要求であらうと思ふが、其當時の米國に於ては獨逸に於ける機械的な教育がペスタロッチーの精神に基き發展的理想となつた様にペスタロッチー其儘の教育主義によりて教育の制度及内容に於てデモクラシーの理想を實現せんとしたのであつた。蓋しモンローによればペスタロッチー主義を米國へ入れるに就てはウイリアム、マクリウアといふ人の骨折を先づ第一に認めねばならない。彼は元來スコットランド生れの商人であつたが千八百〇三年米國へ移住し米國政府より政治問題の委員として佛國へ派遣されることになり、博物館や普通教育などに關する取調をも、委託された。當時エーヴエルドンの小學校に於て其教育主義を實行し名聲歐米に響き渡つて居つた所のペスタロッチーを千八百〇四年及五年と二回訪問し、ペスタロッチーに渡米の上米國教育界の爲めに盡力して貰ひたいと懇願したのであつたが、ペ氏は當時齡六十歳にもなり居ることとて自分の渡米を辭退し、其部下

であつたヨセフ・ネーフを推薦した。ネーフは元來は、ナポレオンの下に働いた軍人であつて戰場で負傷した以て退て教育事業に従事し、千八百年頃ブルグドルフへ赴きベスタロッチーを助けて居つたのであるが、巴里の孤兒救濟協會よりペ氏にペ氏の教育主義に精通する人を求め來りべ氏はネーフを推薦したのである。而してペ氏はマクリウアに向つて再び此ネーフを推薦したのである。斯くて千八百〇六年にネーフは、米國へ渡り千八百〇九年にフヒラデルフニアの學校に於てベスタロッチー主義の教育を實行し初めたのである。其後彼は有名なロバート・オーエンの新らしき試なるユートピア的なデモクラシー主義の新都市なるインデアナ州のニューハーモネーの學校にも招かれ千八百二十五年より三ヶ年許りの間盡力したのであるが、オーエンの試が中止となると共に千八百二十八年に此處を辭し、一二ヶ所に轉勤し千八百五十四年に矢張此ニューハーモネーに於て逝去したのである。(W. S. Monroe: History of the Pestalozzian movement in United States 1907: 39—126 P.)

十八世紀末十九世紀初期に於ては米國の思想界は佛國の物質主義の哲學思想や、スコットランドの實在主義の哲學などの影響を受け東海岸南方は殊に物質主義の思想に傾き、中央部はプリンセトンを中心として實在主義的の傾向を取つたといふと

であるが、北部はエマーソンの如き浪漫的な理想主義の傾向が強い様に思はれる。ベスタロッチの教育主義が最初東部の中央部なるフヒラデルフィアに於て實行され夫れが漸々北部殊にニューヨーク方面に勢力を占むるに至つたのは一面には前にも述ぶる様に北部に於ける勞働階級の生活改善の問題と結び付き易い性質があつたのと、尙モロー一つは北部地方が尙比較的理想的な思想を生活上の背景となした爲めであらうかと思はれる。當時米國に於てベ氏の教育主義の宣傳者として有名であつた所のラッセルや、カーターや、ブルックや、ウッドブリッジや、アルコットの如きは、大抵皆ニューヨーク方面に關係を有する人々でセルドンの如きも紐育州生れの人である。殊にベスタロッチ主義を行政上の方面より鼓吹し實行するに努力したる米國初等教育の父とでも言はるべきホレリス、マンはマサチューセツ州に生れた人であり、又マンの如く行政上の方面よりベ氏の教育主義の實行を力めたのみではなくベスタロッチに關する最も有益なる文献を残し英文にてベスタロッチを研究せんとする人々に對し非常なる便宜を與へた所のヘンリー、バーナードの如きも亦北部地方即コネチカット州に生れた人である。十九世紀後半に於ける米國教育界の名士ハリスもセントルイスに於てベスタロッチ主義を實行したのであるが、彼も亦コネ

クチカットの小學校に入りエール大學を卒業した北部育ちの理想主義者であつた。要は米國に於けるペスタロッチ主義のデモクラチックな教育は最初はネーフの力によりフヒラデルフピアの西方オハイオやインディアナなどにも多少傳へられたのであるけれども、其組織的な強き勢力は主に紐育州や、マサチューセツウや、ロード、アイルランドや、コネクチカットといふ様な米國の東部北方に於て發達し其後セントルイス其他の地方にも及びたるものであると見ることが出来る様である。

要するに十九世紀初半期は米國小學校教育に於ける自覺維新の時代にして米人本來の自由な民主的な自決的な生活を實現すべき基礎として初等教育の普及を圖り其内容に於ては主としてペスタロッチ主義の階級打破的な人本的な教育が民主的な米國民の歡迎する所となつたのである。

教育行政の方面に於ては各州は多く十八世紀末より十九世紀初半期に亘りて制定せる各州の憲法の精神に基き人民一般の教育の普及及内容の改善徹底を圖らん爲めに著しく中央集權的となり南北戰爭に至るまで凡そ二十三州に於て州學務局を設置したのである。ワシントンの如きも獨立戰爭當時より國民的統一を目的とする國民大學の創設の必要を感じて居つた位であつたのであつて人民一般の幸福

を増進する所の民主的生活の基礎としての人民一般の教育を發達せしむる方便上の機關として各州は夫々中央集權的の機關を設くるに至つたのである。元來國家又は公共團體が中央に統一的の機關を設けるといふことは夫れ自身に於てデモクラシーに反するものではない。其機關を運用する態度如何によりて官僚的にもなり民主的にもなり得るのである。中央に統一機關があるからとて常に施政が劃一的の型に入るものではない。自治的に自己を治め得る人民の間に於ても自治上の中央機關が必要であることは論を俟たぬ次第であるが、全く地方に一任して地方が未だ十分に人民一般に機會均等的に公平に自由に幸福を興へ得ない事情がある場合には中央の機關の力によりて此任務を果たさしむる必要があるのである。例へば日本の普通教育の施設經營は國費に依らずして主として地方の費用によりて發展せしむるは地方自治の本義なりなどいふ議論は全く自治の形式的な空虚な解釋である。地方は地方の力で自治的に發展すべしといふ意味の奥には凡ての地方人民に均等的な公正自由な政治が徹底せねばならぬといふ内容的意味が存在せねばならない。若し此機會均等的な處置が地方の力によりて不可能なる場合には國家自らの力によりて此を補助せなくてはならないのである。是に單に一地方的政



治でなく國家全體としての政治となり國民全體としての幸福が均等に増進せられ行く譯である。固より地方によりては勤勉なものも怠惰なものもあつて國費補助や一般に中央機關の活動は此等怠惰な地方民を保護する様なものになりはせないかといふ論もあらんが、これは行政といふ働より監督といふことを全然抜き去つた考方であつて取るに足らぬ議論である。米國に於ける植民時代の狹隘なる自治精神の表現としての教育行政機關であつた所の田舎の學區制度は其後漸次發展せる團體生活に對して極めて不公平な、不利益な機關となつた。此制度は實際に於て十九世紀末頃迄は廢止されなかつたのであるが、十九世紀初めに於てホレイス・マンなどが極力其廢止に努力し人民一般に均等なる幸福を與ふる様な公正な教育機關として州學務局の設置に盡力したのも全く時勢に適する大なる意味に於けるデモクラシイ的な態度であつたのである。教育に熱心なる多くの州に於て殊に十九世紀初め頃より著しく學校基本財産等に關する計畫を立て、中央政府に於ても教育基本財産として土地を分與し千八百七十六年には已に十二萬五千方哩に達し、英本國の面積以上となり而かも此中約八パーセントは初等教育に屬するものであるのである。(Boone, Education in the United States 1903:83-91p.)

## 三

南北戰爭以後暫らくの間は國內の融和統一に苦心され、初等教育に於ては急激なる變化なく、大體に於て十九世紀初半期に於ける自覺維新の事業を繼承し徐々と教育の普及及其内容の改善に力を盡したのである。固より一般の教育状態は其當時の獨逸などに比すれば未だ幼稚なものであつたのであるが、歐米の文明を摸倣するに急であつた日本などに對しては優に忠告者の位地に到達したのである。即ち千八百七十二年我が明治五年に當時の公使であつた森有禮氏は政府の委託に基き米國の大學總長や教育界知名の人々十數名に宛てて教育は國家の物質的發達の上に商業の上に農業及工業の上に、國民の社會的、道德的、健康的方面及其健康上の状態に、一國の法律及政治の上に如何なる影響を及ぼすやといふ様な今日より見れば實に幼稚な質問を發して居る。當時の米國の教育界は此等の間に對して恰かも子供を教ふるが如く極めて常識的に懇切に回答を與へて居る。此中には其後明治六年より六年間日本政府の教育顧問であつたダビット・マレーの忠告文も見へて居るのである。(Ed-

ucation in Japan-A ppleton and Co. N. Y. 1873)

今數字の上より十九世紀後半に於ける米國小學教育の發達を見るのに千八百五十八年には五歳より二十歳迄のもので小學校に出席せるものが全數の約五十九パーセントであつたか、千九百年に至りては小學校に在籍するものは五歳より十八歳迄のものゝ七十二パーセント餘であつて其中日々の出席者は約六十八パーセントとなり、最近に於ては在籍は七十三パーセント餘であつて其中日々の出席者は約七十四パーセントに高まつて來て居るのである。(Philobibius-History and progress of Education 1869: 294-295; Report of the Commissioner of Education 1916 Vol. II. 19 p) 而して其内容の改善に關しては教育上の理論的研究が漸次盛になり、夫れと教育實際とが緊密なる關係を保つに至つたことが十九世紀後半に於ける大なる特色であらうと思ふのである。

米國に於て英文で出版された教授法の書物で最も初めのものは前に述べたベスタロッチ派のネーフが米國へ渡り最初三ヶ年の間専ら英語の研究をなしつつある時代に書いたもので千八百〇八年に出版になつて居るのである。其後千八百四十二年にポッター及エマーソンの合著である所の「學校及學校教師」其他二三のものが出版されたのであるが、十九世紀初半期に公にされたもので最も價值あるものはベ

ジの「教授の理論及實際」といふ書物であつた。ページは幼少より教職を以て自己の天職となさんとの熱心家であつてホレイヌ、マンに知られ、其推薦によりて紐育州アルバニーの師範學校長となり、米國の師範教育史及小學教育史上に異彩を放つ底の改善を試みたのであるが、其著書も米國に於て最も多く又最も永く讀れた教育書の一つである。日本に於ても蘭人ファンカステールの手によりて翻譯され明治九年に出版され一時教育界の重寶であつたのである。彼は其著書の一節に教育者の模範的人物として孔子、ソクラテース、プラトリアリス、テレシス、セネカ、アツシヤム、ミルトン、フランケ、ベスタロッチ、トーマス、アノルドなどを擧げて居るのであるが、彼が教育論の基調もこれによりて略ぼ察知することが出來やうと思ふ。要するに十九世紀前半期に於ては教育の理論的研究は未だ甚だ寂寥の状態であつたのであつて、偶まページの著書の如く歡迎されたものがあつたにしても學術的研究といはんよりは寧ろ通俗的の傾向であり、教育學といはんよりは寧ろ教授法の實際的指針とか、學校管理法の實際的指針とでもいふべき程度のものに過ぎなかつたのである。

十九世紀後半に入りては千八百五十九年に出版されたノルセンの *Teacher's Assistant* の如きは尙通俗的のものであるが、千八百六十五年出版のウイケルシヤムの *Mo-*

ethod of Instruction や千八百七十八年出版のジ・ホノットの Principle and practice of Teaching  
 などは稍學術的の態度となつて居るのである。ウイケルシヤムは認識の本質より説  
 き起して教授上の原理に及び一般の基調は獨逸思想の影響を受けて居る様に思は  
 れる。ジ・ホノットは一面ベスタロッチーやフレイベルなどに私淑し他面には進化論殊  
 に神秘的進化論を主張せるアガシの理科教育などを推奨する所はウイケルシヤム  
 などに見ることの出來ざる一特色であらうと思ふ。蓋しアガシは千八百四十六  
 年米國へ來り千八百七十三年にはマサチューセツの南東ベニケーゼ島に於て夏期  
 の講習會を開きベスタロッチーやフレイベルの教授法に基きて理科教育の改善に  
 努力せるものであつて、進化論の出發點はダーキンの如く機械的にあらず、神は生物  
 の生ずる前に神の心の中に思想の範疇として生物の種の觀念を内具して居るもの  
 で、一切の生物は物質的存在にあらずして神的存在であるといふ様な見方であつた。  
 進化論其ものは別として彼の理科教育法は米國に於ける教授法殊に理科教授法に  
 一新紀元を劃せるものといはれて居るのである。而かも其方法はベスタロッチーの  
 外尙ほフレイベルなどの主義に基くものであるとするならばジ・ホノットの教育思想  
 の基調は失張餘程獨乙的思想の影響を受けて居るとも見られるのである。元來哲

學の方面に於ては十八世紀の末頃に已にカントは米國に紹介され、十九世紀初半期にはエール大學の教授や、獨逸への留學生の歸朝などによりて獨逸近代の哲學思想が紹介され、殊に十九世紀後半の初め頃より後年米國教育界の名士となつた所のウイリアム・ハリヌなどが獨逸の隱逃哲人と呼ばれたブロックマエヤーなどの教によりてヘーゲルの研究者となり千八百六十七年より同九十三年迄哲學雜誌を出版し獨逸の哲學思想を米國に紹介しロイスやゼームスの如きも此等の雜誌より感激を受けたといふことであるが、此等獨逸思想は自然に教育思想にも少からざる影響を與へたものであらうと思ふのである。(Riley-American thought 329-354 p.)

十九世紀後半に於ける教育思想中ウイケルシャムやジヨホノットのものよりも一層米國的色彩を有しデモクラシーの主義の下に教育思想を取り扱ひ大なる影響を米國の教育界に與へたものは曾て谷本博士の指導の下に樋口氏などの活動主義として日本の教育界に紹介された所のパーカーの思想である。彼は生得的に教師の職を樂み、曾て教職を辭して南北戦争にも出て激戦の經驗をもなし佐官の階級に上りたるも、戦後再び教職に従事し、教育の原理研究の目的で獨逸へも留學し、歸朝の後ケンシーの小學校長として所謂クエンシー式の教育法を試み、教育界に多大の刺激を

與へ、其後一二ヶ所に轉じ、教育行政に關する經驗をも積み晩年はシカゴ大學の教育部長ともなり、教育實際の方面に於ても相當の成績を擧げ、十九世紀後半期に於ける教育界の名士であるのである。彼の教育思想は主として千八百八十三年出版の *Talkson Teaching* 千八百九十一年出版の *Talks on Pedagogics* の二書に於て發表されてゐるのであるが、其集注主義統一主義は彼自ら告白して居る様に主としてヘルバルト派及フレイベルなどの思想に基くものである。而かも彼の直接理想とする所は米國本來のデモクラシーの實現であつた。彼の思想はデュイイなどに比すれば其論理的、哲學的方面に於て幼稚なるの感があるけれども、其理想主義的な態度に於て一種の味が感ぜらるゝ様である。彼は貴族主義的生活の根本動機は少數者の我欲である。支配欲、勢力欲であり、安逸豪惰の欲であつて、其方法としては神秘主義であり、警察的監獄的拷問的軍隊的な腕力主義であり、賄路主義であり、孤立的階級分離主義であり、従つて教育も階級的であり又分量主義である之れに反して民主生活は社會自身が自己を支配すとの原理の上に成立するものである。社會の各員は社會の善に寄與し社會の爲めに生活し社會が與へ得るものを受取るのである。民主生活の根本原理は各人が凡てに對し、凡ては各人に對する責任である、人道の目標はフリー

ドムといふものである。リバーティは各人の權利でフリードムは神の法則を詮索し夫れを遵奉する所に得らるゝものである。フリードムの所有者は幸福、市民的資格、個人の發展、道德的行爲、等其所有者に對するあらゆる善を内具して居るのである。

社會が個人に與へ得る最上の個人的權利はフリーとなるべきリバーティと方法とである。此フリードムを得る唯一の方法は即教育である、殊に初等教育である、其教育は分量的のものではなく質的のものであらねばならない。デモクラシーの本義は個人々々に眞の自由を體得せしむべき自由を與ふるにあり、人間と人間の達せんとする目的との間に濫りに人爲的なる無益の社會的及政治的障壁を設くべき筈でないのに拘らず現代の米國に於ては尙ほ此等の障壁に妨げられて半數以上の人民は自由の境遇に達して居らないのである。之れ畢竟小學教育の不完全なるに因るものであると論じ、小學校の成績の如何は其教授法や教科目のみに依存するものではなく社會的要素に依存することが大である。即小學校は社會の凡ての階級の子弟が一所に集り互に精神的交渉融合をなすの場所である。デモクラシーは凡てが各自に對する責務の自覺であつて此自覺は斯かる平民的な平等の學校に於いて訓練されねばならぬと説て居るのである。(Parker-Talks on Pedagogics 401—451 p) 彼れに



ありて斯くして得たる精神こそ神の寫像としての人間の價值生活であつたのである。要するに彼の教育思想は一般的學術的の傾向に於ても相當の價值を有し而かも其構成せる原理は米國のデモクラシイ的生活の實現に適合する所の自治的な創造的な人格を作り上げんとしたのであつた。而かも其デモクラシイは單に政治のデモクラシイではなく社會的であり、又宗教的氣分のものであつたのである態度としてのデモクラシイの外に理想としてのデモクラシイを認めて居るのである。ホレイス、マンや、バーナードなどが民主生活實現の爲めに小學教育改善に努力せる以來三四十年の後に於てバーカアの如き思想と實際の兩方面に於て教育内容の革新に盡せる人物を出したのは米國教育史上の重要な事實といふはねばならない。

#### 四

千八百六十三年十一月十九日ゲッテスブルグに於ける南北戦争戦死者記念碑除幕式に於てリンカーンの試みたる追悼演說中の有名な言葉である所の人民に由て、人民の爲めの、人民の政治といふ民主主義は主として政治上の民主生活を意味するものであらうが、南北戦争以後に於て大西洋の海底電線の布設や、米大陸横斷の鐵道の

完成や電話や、電燈の使用等文明の利器の發達するに従ひ、或る意味に於て社會生活は流動的となり幸福均沾の機會も多くなつたものであるけれども、都市の發達は都市と田舎との差別を大ならしめ、貧富の懸隔は自然に階級的狀態を生み出し、社會生活一般は植民時代などに比すればデモクシーの氣分を減じ、寧ろ或る意味に於ける階級の生活となつた政治の方面に於ては十九世紀初半に於て多くの州に於て選舉權の資格を輕減して其權利を擴張し遂に漸次普通選舉的に民主的に進んで來たのであるけれども、社會的生活に於ては寧ろ階級的差別的の狀態が著しくなつて來たのである。殊に此傾向は近代に至りて益甚だしくなつて來たので、千九百〇九年ルイヅヴェルト内閣時代に於ては田舎の農村生活の改良調査委員などが設けられ、農民とは都市に依存せずして農村夫れ自身に於て可成完全なる生活を味ひ都市住民と農民との間に幸福の均沾を圖らんとし農村の教育の如きも斯かる主義の下に漸次改良されつゝあるのである。斯の如き社會的狀態の下にデュウイの様な社會上の民主生活の教育思想が表はれ來るのは決して偶然とはいはれないのである。政治上に於ても選舉の資格を有するものは皆盡く果して自主的能力を有して居るや否やは疑問であつて、此點に於ては學校教育や社會教育に於て所謂公民教育の必要もあ

るであらうが、最近の米國教育界に於けるデモクラシーは政治的方面よりは寧ろ社會的方面に注意されて來たのである。デュウイは民主的社會生活の標準として第一に社會が共有する共同の利害といふものが單一なるものではなく色々澤山ありて且又夫れが多様複雑なものである。而かも其相互的に共有する利害の承認に對し十分なる信頼を有すべきであるとなし、第二には他の種々の社會的團體と益々自由なる交渉をなすのみならず、其社會的習慣を變化すべきである即複雑多様の交渉より生ずる新らしき境遇に接して不斷に改整さるべきであると論じて居る(Dewey-Democracy and Education 1916:100 p)が、第一の標準に於ては豊富にして價値ある社會生活の内容を要求し又成員相互の協同の特徴を要求するものであり、第二の標準に於ては孤立的階級的の社會を排して社會相互の平和的交渉及協調を要求し而かも社會に於ける不斷の改造發展を期するものと見ることが出来るのである。斯かる意味の民主的社會を構成するには教育の力によりて個人々々の自發性や自由なる創造力を養はざるべからざるは勿論であるが、學校夫れ自身は斯かる民主的社會の生きた胎生の形として經營されねばならない、實際上の民主的社會生活を構成する基本力は民主的社會生活の胎兒としての教育活動に依存するのである。デモクラシ

目的の教育であつて初めてデモクラシーの社會が構成されるのである。ゲイリ式教育の如きは實に或る意味に於て此の思想の具體化されたものと見てもよいのである。生産や功利上の能率のみを見ずして心的經驗を重んじ自ら物質主義に陥らざらんことを警戒するの態度はデュウイの實用主義の深味であるが、思想の獨立的價値を輕んじ此を道具と見たる點に於ては内面生活のデモクラシーに於て徹底せるものではない、斯かる根柢に立ちて果して眞の意味に於ける社會生活のデモクラシーが建設さるゝや否やは疑問とする所なるも、子供の自發的活動に満足を與へ、教育といふ生活を愉快に味はしめんとする努力は多とすべきである。其他或はサイチの個性適應の教育論の如きエリザベス式とか、ケンブリッジ式とか、バタビヤ式とか色々な考案の下に差別的な個性に應じて教育上の機會均等を行はんとしつゝある諸種の試なども此等の目的を達せん爲めに生徒の方面より見たるデモクラシー的の教育案の一つであるとするのも、出來るのである。

要するに植民時代に於て其初等教育の狀況は未だ民主生活の自覺の自覺に乏しく、獨立戰爭後殊に十九世紀初半期に於てはホレリス、マンやバーナードの如く民主的生活と初等教育の關係に就て自覺する所があつたのであるが民主生活其ものに

就ては自主自決とか自由平等といふ様なことは考へて居つたにしても尙甚だ漠然たるの感があるのである。十九世紀後半に至り殊にパーカーなどによりて民主生活の政治的社會的意義が自覺されて來たのであるが更らに現代デュワイなどによりて殊に社會上の民主生活が高調され初等教育は此等の思想に支配されて居る有様に見受けらるのである。ハートの近著教育に於ける民主生活の最後に於ても一種の社會的な民主生活の教育に關し有益なる意見の發表もあるのであるが谷本博士により教育學術界の今年六月號に要點を紹介されて居るから此場合此處には省略したいと思ふ。

#### 前掲以外の主なる參考書目

1. Rosher u. Jannusch—Kolonien, Kolonialpolitik u. Auswanderung 1885 3ter Aufl.
2. Channing—History of the United States.
3. Hoyt—American Nation.
4. Wrieht—Industrial Evolution of the U. S. 1901
5. Bogart and Thompson—Reading in the Economic History of the U. S. 1917
6. Moore—Fifty Years of American Education 1917
7. Horace Mann's Work.
8. W. S. Moore—Educational labours of H. Barnard 1893.
9. Fought—Rural Teacher and his Work—1917.

1030

10. Vogt—Introduction to Rural Sociology 1917.
11. Dewey—My pedagogic Creed.
12. J. K. Hart—Democracy in Education 1918.
13. Report of Commissioner of Education 1871 : 1896 Vol I ; 1903 Vol I, II; 1904 Vol. I, II.
14. Report of the Mass. Board of Education I—XII ; XXXVIII.
15. Randale—History of the Common school system of N. Y. 1871.